

本多啓三氏の姿勢が問われる

(三条新聞合流点 平成二十七年七月十日 月曜日から転記)

ようやくおもてなし広場の工事入札が終わり、計画が進むことは大変喜ばしいことです。

本多啓三氏の思惑通りの入札結果になり、臨時議会では全員賛成で議決されることでしょう。それはそれでよいのですが、識者、村民は今回の入札結果がどうだったのか気になりませんか。報道での結果を見ると、建築工事は二社が辞退し地元の一社(本社は近

隣だが弥彦支店)のみ、電気工事は村内業者二社のみ参加。辞退した二社は村外。また、電気工事は近隣に優秀な会社があるが、それらは見向きもしなかった(真意は不明だが)。

先回の議会で花井議員がこのままでは村外業者が入札に躊躇してしまうと言っていたように、そのとおりの結果になってしまいました。このようなことを続けていけば、

村内業者の技術力も自然に低下、仕事に対する意識も変わってくるでしょう。それは弥彦村が近隣から見放されてしまったとも言えるのではないのでしょうか。

もともと村長選時から大谷陣営は村外にいた者には村長の資格はない、村外からの村幹部はいらないという従来からの姿勢は変わっていないのだ。常にその意識があり、縁もゆかりもない村外業

者はいらないと発言し、この入札結果に持ち込んだ本多啓三氏の姿勢が問われる。

村は全体の工事費を抑えたいと外溝工事の入札は後日になるらしいが、単純計算では二千万円の経費増が我々村民の負担になるのです。このことに対しても無駄遣い大勢の当事者だった本多氏は金を出すのはオレではないからと責任論には無干渉です。

このような弥彦村に不安があります。ただ勘違いしてほしくないのが、今回落札した業者に悪意を持っていてではなく、もちろん、立派な会社であることは承知しており素晴らしい工事をしてもらうことを確信してしまっただけで誤解の内容にしてください。(弥彦村・新生弥彦を望む村人)

村の皆さんが弥彦村を守ってください

(三条新聞合流点 平成二十七年七月十四 日 金曜日)

十日の「合流点」は自分から書くころと思つた内容ですが、臨時議会の裁決して影響すると思ひ止めて来ましたが、十一日の臨時議会内容の報道でなおいっそう不信感を持ちました。まず今回の入札内容についてですが、前回の議会で本多啓三が「不可解な入札」と言つたが、本当に摩訶不思議なそれに言いあてはまる入札内容です。

村民の皆さんも同調してゐると思ひますのでそれ以上は言ひません。問題は十一日の臨時議会報道を見て驚きと同時に連中はまた何をたくらんでゐるのかと感じたからです。記事の順不同だが高峰が『不調に…』と質問したと載つてゐるが、もしかしたら不調にさせてさらに工事を延期させる方向に持つて行こうとしたのかと。それ以上に本多啓三が『観光協会が受けるわけにはいかな

い…』とした質問の真意は何か。それは『観光協会がうけさせないようにはさせるぞ』と、感じた次第です。今までの啓三の山口からすると十分考えられることです。それどころかすでに裏工作が進んでゐるはずで

ことが見え見えの言動と見ました。なぜ弥彦村のことを気にしてゐるかといへば自身は弥彦村出身で、啓三のことも知つてゐるからです。どうか村民の皆さん、皆さんの力で弥彦村を変えてください、故郷を守ってください。

村長は気がよすぎる面もありますが、国、県はもちろん、驚くほどの幅広さと人脈があり、それを生かした行動力を持つた村長に期待してください。

それは新生弥彦村民さんが言つた通りですの

で

す。

い。ただだれかには遠く及ばない金脈だけが期待できないが…。その金脈を期待してゐる村民はどれくらいいるのだろうか。さか観光協会員は？。それはないことを祈るのみである。(友達作戦中の燕市民)

いつになるのか弥彦村の梅雨明け

(三条新聞合流点 平成二十七年七月二十六日 水曜日)

いよいよ梅雨明けか。しかし、喜んではいられないほどの猛暑の予報。全国各地で報じられている熱中症が心配だ。わが弥彦村では他人事ではない事例が過去に起きてい

る。昨年は、OBや関係者などが積極的に勧誘し久しぶりに大学のサークル合宿があったが、熱中症が発生、まかり間違えば取り返しのつかない事故につながるところであった。

二階へ行くことができないなど体育館としての機能がたりない、不適切な施設と追及、最近まで各所でその不具合を指摘・報告していた。数年以上前には体育館でその大学サークルが合宿し、やはり熱中症になり、こんな危険な会場では今後来ることはないとの声もあつた。それなのに昨年、合宿を勧誘した関係者はそれらを周知していたのだろうか。人為的事故になるのだろうか。

である。しかし元々はこのように不具合な施設を建設した当時の村当局に疑問。疑問ついでにこの体育館を落札工事した大手ゼネコンとの談合疑惑はマスコミで報じられ、議会でも紛糾した経緯がある。また、ヤホールも冷暖房やトイレがなく(トイレはその後離れたところ(設置)、避難場所として不適切なものである)。

それはさておき、今年もそれはさておき、今年合宿などはあるのだろうか。工事入札に村外などからの応札で村に刺激を

与えてくれるだろうか。村外出品者の多い菊祭りがいつまで続けられるのか。国外・県外・村外から多くの観光客、業界などが不安、不満、不信感をもつことなく気軽に訪れていただくようにする努力が必要。神社・競輪の恩恵でいっしか中毒になつていることに気づくべきだ。

その中毒で思考停止状態から、自身で考え、自分の足で歩こうとする努力が肝心だ。冒頭の熱中症対策のように、施設の不具合、村の財政悪化などに目を背けるのではなく、しっかりと現状に向

き合い対策を立て、弥彦村が村民が傍らから見捨てられないようにするための知恵をだそうではないか。弥彦村の梅雨明けはいつになるのか。(弥彦ファースト民)

我が弥彦村に『ケネデイ』や『鷹山』の志を持つ勇士を待つ

(三条新聞合流点 平成二十七年八月二十一日 月曜日)

『いつまでもあると思
うな親とかね』のことわ
ざがある。アメリカ経済
の立て直しに国民が国に
対してなすべき関係を例
えた名言を発したケネデ
イ元大統領に、日本で一
番尊敬する日本人はと問
うた日本のマスコミに江
戸時代中期にかずかずの
施策、自らも貧困生活を立
ち直らせた『上杉鷹山』
と答えた。その時、マス
コミは『だれ?』と。そ
れほど高度成長時代の日
本では財政悪化への対策

などだれも感じなかつた
のではないか。
わが弥彦村も同様で神
社や競輪からもたらされ
た裕福なときにいったい
どのような将来展望があ
ったのだろうか。むやみ
やたらにばらまかれた政
策をどこで軌道修正する
か気づかなかつたのだろ
うか。過去の政権に疑問
を覚えます。
それでも大谷氏は競輪
の見直しと競輪場を買い
上げ、重賞レースの誘致
をしたが、その結果につ
いて議会で答弁した数億

という収益はどこに消え
たと、七月一、二日に投
稿の村民さんが言ってい
るように、そこでも疑念
があることは確か。
国会で過去の答弁、書
類が問題になってい
、濃度で言えば弥彦村は
それ以上と疑われる疑義
を追及できないものか。
今はしっかり事実を
解明し、解明できずとも
あったことの事実を公に
するべく、当時を知る職
員、元職員、村民の勇氣
ある行動が望まれる。当
然その人の人権を保護し

た上で。
そして財政立て直しの
ため事業主や村の実力者
と自負する方々が声を上
げ自分達でできることは
自分達で立ち上げれば
、それならばと続く村民
はいるはずだ。
特定のところ、人たち
だけに流れたと思われ
我々の税金、それに疑問
、追及の声を上げなけれ
ばならない。
しかし自分一人ぐら
いは禁漁せずとも体勢に影
響はないと従来の利権、
金権欲求のため、今日も

闇漁に出る者の数多いこ
とから容易でない状態
ある。そして、事業主や
実力者はすでに魔の手が
回っているからそれも期
待できないのである。
ウナギを食べられない
私のようなものが声を上
げてるだれも見向きもし
ないが、わが弥彦村に『
ケネデイ』や『鷹山』の
志をもった勇士が現れる
ことを望みます。
(弥彦村の貧乏人)

『わが弥彦村に「ケネテディ」や「鷹山」の志をもつ勇士を待つ』を拝読し、それなりの立場を経験されたお方と拝察します。

バブル景気が崩壊して失われた二十年と呼ばれる経済低迷の時代に突入するとき、企業は生き残るために何をすべきかと多くの人が悩んだ。そんな時、経営立て直しに上杉鷹山の経営手法が再評価され、童門冬二著「上杉鷹山」「上杉鷹山の経営哲学」や「松下幸之助の経営哲学」などから「何か」を学び取り、自社の生き残り策を必死に考えた。鷹山の経営思想は、現在も管理者や社員教育などに生かされている。

バブル前後のわが弥彦村はどうであったろうか。昭和五十年代から競輪バブルが続き、村全体がウハウハ状態となり、

他から羨まれる公共施設の建設やインフラ整備も進んだ。その一方で、小さなことでも村に要望すれば大部分がかなえられた。いつの間にか自助努力を忘れて、村へ依存することが「当り前」にな

っていった。バブル崩壊後も競輪バブルは約十年続いたといっている。この間の一般会計への繰入は約五十億、年平均五億円である。

さて、鷹山は上杉藩の娘婿として十七歳で藩主となったが、借金まみれ、破綻寸前の状態から、自ら質素節約を実行し、身分やしきたりの壁を取り払い、金の出入りの検証結果に基づいた各種改革を行って、十年で財政状況を好転させたのである。

藩士の意識改革には、藩財政の現状分析と目標を示し、改革は「領民を富ませるため」に行うとして、共鳴する藩士に改革の尖兵（火種）となるよう説いた（火ダネ論）のである。

産業改革として鯉の養殖をはじめ、新田開拓や東北の地に適する漆、楮、桑の栽培、冷害に強い麦の生産などである。不足する労働力は藩士やその家族が当たった。そして生産物に付加価値をつけるため、技術者を他藩から高額報酬で雇い、技術導入を図った。

やがて改革の火ダネが火ダネを産んで、武士といわず、町民も農民も進んで改革に協力した。意識改革が実ったのだ。改革途中には浅間山噴火による天明の大飢饉が襲うが、米沢藩は一人の餓死者も出さなかったという

しかし、抵抗勢力として最後まで残ったのが、家老を含む重臣七人だ。当初から鷹山の改革を批判するとともに悪口を流布し、さらに七人の連署による抗議文が出された

鷹山は内容を確かめるため、有りのままの現場を見て意見を聞いたが、旧来の利権を守るため事実を歪曲したものであることを知り、後に二人の家老は切腹、五人の重臣は蟄居謹慎、俸禄召上げの処分となった。現在の米沢織、絹製品、漆器、紅花、一刀彫などは、産業改革による成果だ。

このたびの「合流点」を読み、冒頭に記した本を再読した。

藩↓村、藩主↓村長、七人の抵抗勢力↓議会、藩士↓職員や区長など村の業務に携わる人、領民↓村民、と読み替えたら、鷹山が苦勞した二百四

十年前の米沢藩と重なった。

とくに「過去の当り前」の依存体質から変われない一部村民、財政状況など喫緊の問題からことさらに目をそらし、旧態依然としたやり方に固執する村議会である。

他市から確実に笑われるだろうが、わが弥彦村には今こそ「火ダネ運動」で「まともな村」への意識改革が必要、と痛感した次第である。弥彦村議会議員諸氏には、必読書として推奨する。

(弥彦村民)

○：行政監査にはいくつ種類がある。事務や公金の執行管理が適法かつ公正に、無駄なく効率的に行われているかどうかをチェックするためだ。基本は議会の同意を得て首長が任命する監査委員が担当が、他に外部監査という制度もある。監査機関の独立性と専門性を強化するためのもので、弁護士や公認会計士など高度な知識を持った実務に精通した専門家が行う。都道府県や政令指定都市、中核市では監査委員とは別に外部監査も行うことが当たり前となっている。一般の市町村でも導入例が増えつつある。

○：弥彦村でも小林豊彦村長が外部監査制度を取り入れようとしているが、議会が反対している。村長が最初に導入を試みたのは昨年六月定例会。競輪事業特別会計の外部監査契約を一千万円で結ぶことを提案したが、議会は賛成少数で否決した。村長は次の九月定例会で調査対象期間を短縮し、委託料を八百万円に減らした契約を提案したが、議会はこれも否決した。村長はあきらめない。十二月定例会では、四百五十万円、ことし三月以降も各定例会に四百五十万円の外部監査委託料を提案し続けている。村長

も頑固なら議会も頑固で議会側は村長が何度提案しても、頑なに拒み続けている。○：村長が外部監査にこだわるのは「競輪事業を継続するため、しがらみのない外部の専門家にチェックしてもらって無駄を省く」ためだ。一般的にこういう意見は議会側から出ることが多い。外部監査で無駄が指摘された場合、その無駄に気付かなかつた首長の責任が問われるからだ。弥彦村は逆で、首長が外部監査をやろうと提案しているのに、議会が「そこまでする必要はない」と拒否している。ベテラン議員

は「不正会計の発見を専門とする会計事務所に頼もうとするから反発が出てくる」と指摘している。村長選のしこりが外部監査を拒んでいるというわけだ。外部監査を拒むことで痛くもない腹を探られては大谷良孝前村長も迷惑だろう。小林村政となつてすでに二年半が過ぎた。議会は外部監査で無駄が見つかれば、それを放置してきた村長を責めることができるし、四百五十万円の委託料を投じただけの効果がなければ、それ自体が無駄だと村長の責任を問うことができる。議会が監査に消極的では監視機能が疑われかねない。(S)